The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ロドリゲス日本大文典の不完全過去について
Author(s)	福田, 嘉一郎
Citation	詞林. 1991, 9, p. 58-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67303
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ロドリゲス日本大文典の不完全過去について

福田 嘉一郎

はじめに

日本語の動詞のいわゆるテンス＝アスペクト表現に関する研究は、周知のごとく現代語を対象として始められ、近年は古代語にも拡げられつつある[注1]。筆者は、近代語の出発点とも言うべき中世語の動詞のテンス＝アスペクト体系に関心を抱いているのであるが、本稿ではそれとの関連で、ロドリゲス日本大文典の「不完全過去」について考察し、ロドリゲスが動詞[注2]の現在形を「不完全過去」にあたるとするとき、真に記述しようとしていた言語事象を明らかにしたい。これは、外国資料である日本大文典の性格の一端を探ることでもある。

1　問題点――ロドリゲス日本大文典の「不完全過去」に関する記述

ロドリゲス日本大文典[注3]（1604―08年刊）では、当時の日本語における動詞の「直説法」（Modo indicatiuo）の形式を、以下のように記述している。

話しことばに用ある肯定第一種活用[注4]

○動詞 Ague（上げ），aguru（上ぐる）の直説法に於ける現在

……

○Vare（われ）。　Aguru（上ぐる）。
　Nangi（汝）。　Aguru（上ぐる）。
　Are（あれ）。　Aguru（上ぐる）。

……

○不完全過去

Aguru（上ぐる）。
Agueta（上げた）。
Aguetaru（上げたる）。

○完全過去

……

Agueta（上げた）。
Aguetaru（上げたる）。
Aguetçuru（上げつる）。
Aguete gozaru（上げてござる）。
Aguetçu（上げつ）。
……　　（p.31ff.、注・太字・下線は筆者、訳者註省略）

これによれば動詞の現在形（～ル）も、過去形（～タ）も、ともに「不完全過去」（Preterito imperfeito）を表すことがあるとされている。このことについてのより詳しい記述を同書に求めると、次のような個所がある。

○不完全過去に就いて

○この過去には固有の形がなくて，直説法の現在か完全過去かを用ゐる。殊に Toqui（時），aida（間），vchi（中）に接した直説法現在が完全過去に先行した場合にさうである。例へば，Caqu vchini maitta（書く中に参った）。書いてゐた間に参ったの意。　　（p.46）

さらに、日本大文典の、特に94丁まで（訳註本 p.7-360）の文法的説明は、それに先立つ天草版アルヴァレスラテン文典（1594年）の組織に則ったものであるが[注5]、その天草版ラテン文典でも、能動相・直説法の未完了過去の例として、日本語の動詞の現在形と過去形とを並べている。

Praeteritum imperfectum.

¶ *Amabam,*	*Vare*		Eu amaua.
Amabas,	*Nangi*		Tu amauas.
Amabat,	*Are*	Taixetni **vomô**, A,	Elle amaua.
Plu. Amabamus,	*Varera*	Taixetni **vomôta**.	Nos amauamos.
Amabatis,	*Nangira*		Vos amaueis.
Amabant,	*Arera*		Elles amauam.

（18、太字は筆者）

以上から、ロドリゲスの「不完全過去」に関する記述は、天草版ラテン文典に基づいていることがわかる。

他方、天草本平家物語（1592年刊）や天草本伊曽保物語（1593年刊）といったキリシタン資料は、ロドリゲス大文典を集大成とするキリシタン的規範に従って編纂されたものであることが明らかになっている[注6]。ところが私見によれば、（動詞の過去形が過去の事態を示すのは一応当然であるとして）動詞の現在形が終止用法で過去の事態を示していると解釈すべき例は、次章で述べるいわゆる歴史的現在の場合を除いて、キリシタン資料に存在しない。「不完全過去」に現在

形をあてるロドリゲスの説明には、何か問題がひそんでいると思われるのである。

2　天草本平家物語に見られるいわゆる歴史的現在

安田章氏[注7]は、天草本平家物語における語りの地の文について、「ハビヤンは、平家の各センテンスを～タで語り終えることを基調としていたように思われる」とされ、～タで語り終えない例外的な場合の一つを挙げて、次のように述べておられる。

……これに対して、タで語り終えない場合の一つは、タの枠内で、生き生きとした表現効果を出すために動詞の終止形を使うケースで、この場合、形は終止形ではあるがピリオドを必ずしも伴なわず、ローマ字本の利点を生かして、コンマ・コロン・セミコロンで立体化を意図していることの多いのが注意される。

○義経をはじめ奉って，……馬の下手にとりつきとりつき渡いた．……畠山は乗りがへに乗ってうち上る：……本田が鞍のしほでにつけさせた：……木幡山伏見をさいて落ち行く；……宇治川のまっ先と申す：……宇治川の先陣佐々木の四郎，二陣梶原源太と書かれてござった．　(236～7)

○夜は既にほのぼのと明けゆく：……木戸を開いて駆け出た．……これは何として討ち取らうぞとののしった．熊谷これを見て，平山を討たすまいとて続いて駆くる．平山が駆くれば，熊谷続く：熊谷が駆くれば，平山続く，……敵を外様にないて戦うた．　(264～5)

「平家の物語」の内容は、天草本の話し手（喜一検校）と聞き手（右馬之允）にとって、確かに過去の出来事であるから、原拠本での地の文に相当する個所に現れる動詞の現在形は、過去の事態を示していると言えるかもしれない。では、ロドリゲスが日本大文典で「不完全過去」にあたるとした現在形は、上のようないわゆる歴史的現在のことなのであろうか。筆者は、次の二つの理由により、そうではないと考える。

その１。ラテン語の未完了過去、あるいはポルトガル語の「不完全過去」は、持続的、習慣的であるととらえられた過去の事態を示す時制であり、これに対してラテン語の完了（Praeteritum perfectum）、ポルトガル語の「完全過去」（Preterito perfeito）は、点的・完結的であるととらえられた過去の事態を示す時制であると、一般に理解されている。実際の物語などにおいては、前者が背景となる事柄を示し、後者が前景の事柄を示す。ラテン語では例えば、

（１）　nostram aciem *premebant*--Publius Crassus--tertiam aciem laborantibus nostris subsidio *misit*（〈敵陣は〉味方の戦陣をおしていた。プブリウス・クラッススは第三の戦陣を苦戦している味方の援助に送った）

（ガリア戦記、Ⅰ—52）

（２） omnes clientes obaeratosque suos, quorum magnum numerum *habebat*, eodem *conduxit*（〈オルゲトリクスは〉夥大な数に上る被護民や負債者をそこに集めた）（同、Ⅰ—４）

のように、未完了過去（premebant＜premo、habebat＜habeo）および完了（misit＜mitto、conduxit＜conduco）が用いられる。一方、天草本平家物語に見られる歴史的現在のうち、安田氏の引用されたものから例をとると、「夜は既にほのぼのと明けゆく」（p.264）などは、背景的な事柄を示していて、これをもしラテン語やポルトガル語で言うとすれば、未完了過去や「不完全過去」が選ばれるであろう。しかし、その他の「畠山は乗りがへに乗ってうち上る」（p.237）、「平山を討たすまいとて続いて駆くる」（p.264）などが示しているのは、いずれも物語の前景であり、ラテン語やポルトガル語の対訳としては、完了や「完全過去」がふさわしいと思われる。しかるに日本大文典の「完全過去」の項には、動詞の現在形が収められていない。ロドリゲスが歴史的現在を「不完全過去」にあてたのなら、「完全過去」にもあてなければならなかったはずである。

その２。過去の叙述に生き生きとした表現効果を与えるための歴史的現在は、ラテン語でも勿論頻繁に用いられるが、ラテン文法の動詞の変化表において、歴史的現在がとりあげられることはない（例えばアルヴァレスラテン文典を参照）。これは、歴史的現在を文法論上の事象ではなく、文体論上の事象であるとする見方による。したがって、ロドリゲスが日本語の動詞の形式を記述する場合に、歴史的現在をもちこんだとは考えにくい。

——以上、２点を指摘した。

３　「直説法」としての連体用法述語

ここで、先に引いたロドリゲス日本大文典の記述に、再び注意してみたい。

（不完全過去に就いて）……殊に Toqui（時），aida（間），vchi（中）に接した直説法現在が完全過去に先行した場合にさうである。例へば，Caqu vchini maitta（書く中に参った）。書いてゐた間に参ったの意。　　（p.46）

「書く中に参った」の「書く」は、日本語の立場から見れば、終止用法ではなく連体用法であり、ただそのかかってゆく体言「中」は、いわゆる時間の形式名詞に属する。ロドリゲスはこのような連体用法の述語も、「直説法」と受けとめているらしいのである。まず、「時」「間」「中」等の形式名詞にかかる動詞の連体現在形について述べた個所が日本大文典にあるので、それを引用して考察を加えることにする。

○接続法を決定することになる或種の助辞及び言ひ方に就いて

○直説法に接続してしばしば接続法の代りをなす助辞が多数ある。然しそれは時には直説法とも観られる。その中の一部は実名詞であり，他は本来助辞に属するものである。

Aguru（上ぐる）。	Toqui（時）。又は，toquiua（時は）。 Toquimba（時んば）。 Vorifuxi（折節）。	これは拉丁語の Cùm（時に），Dum（間に）に相当する。

……

Voquino catauo nagamuru vorifuxi, asafi saxivataru.（沖の方を眺むる折節，朝日さし渡る。）「黒船物語」（curofune〈訳者註：Curofune の誤植。〉monog.）

Miaco yori macari cudaru toqui, roxide cotono foca xinrŏ ximaraxita.（都より罷り下る時，路次で殊の外辛労しまらした。）「客人」（Quiacujin）

……

Aguru（上ぐる）。 Agueta（上げた）。	Vchini（内に）。 Aidani（間に）。 Nacani（中に）。 Nacabani（半に）。 Tocoroni（処に）。	これらは Cùm（時に），Dum（間に）に当る。

Macagueuo saite nobitçu cagŏdzu miru aidani, voqui yori suzuxij araxi fuqui quru.（目影をさいて伸びつ屈うづ見る間に，沖より涼しい嵐吹き来る。）「黒船の物語」（Curofuneno Monog.）

……　(p.70ff.)

「直説法」は話し手が叙述内容を現実とする叙法、「接続法」（Modo conjuntiuo）は叙述内容を現実と保証しない叙法である[注8]。ロドリゲスの挙げる例に従って考えるならば、彼がここで言わんとしているのは次のようなことであろうと思われる。すなわち、「沖の方を眺むる折節」「都より罷り下る時」「伸びつ屈うづ見る間に」において、「眺めている」「下った」「見ている」ことは仮想ではなく現実であるから、それらの動詞の連体現在形は「接続法」ではなく「直説法」にあたるというわけである[注9]。

このようにロドリゲスは、時間の形式名詞にかかる連体用法の述語であっても、「直説法」に相当する場合があると説明している。しかし、ロドリゲスが「直説法」と受けとめる連体用法述語は、時間の形式名詞にかかってゆくものだけでは

ない。日本語の通常の名詞にかかる連体用法の述語をラテン語やポルトガル語に置き換えるとき、普通に用いられる構造は関係節であるが、日本大文典ではそのことについて、次のように述べている。

この国語に於ける関係詞を葡語で言ひ換へる方法に就いて

○日本語には拉丁語の関係詞 Qui, Quae, Quod に当るものがない。故に，すべての格にわたって関係句を如何にして作るか，又我々の国語でそれを如何に言ひ換へるかといふ方法を知る事は甚だ必要である。

○関係詞は，如何なる格に立ってゐても，言ひ方でそれと理解されるのである。わざわざ言ひ表すことをしないで句のなかに含まれてゐる。関係句をつくるのに知って置くとよい事は，先行語即ち叙述せられるものは動詞の直後に置かれ，言ひ表されなくても理解せられる関係詞はその動詞の支配を受けてゐる事である。例へば，Vonoreni xicazaru monouo tomoto surucoto nacare.（己に如かざる者を友とすることなかれ。）「論語」（Rongo）— Não(ママ) tomes por companheiro a pessoa, que não(ママ) for melhor que tu（汝より勝れてゐない所の者を友として持つな）の意。Monouo（者を）が先行語である。Xicazaru（如かざる）が動詞であって，その動詞は，言ひ表さないでも理解せられ，また動詞 ser melhor（すぐれてゐる）の主格語である関係詞 Que を支配してゐる。

○同様にして，Yomu fito（読む人）は O homem que le（読む所の人）の意，Faxiru fune（走る舟）は O nauio que vay à vela（帆走する所の船）の意である。……上掲の例でも見られるやうに，動詞と先行語以外の語はなく，関係詞は言ひ方によってそれと理解されるのである。

……　　（p.332ff.、太字は筆者、訳者註省略）

論語の例「己に如かざる者を友とすることなかれ」は一般論を言う文なので、ポルトガル語の対訳において、関係節の中の動詞は「接続法」の for（＜ser）になっているけれども、「読む人」「走る舟」に対応するポルトガル語の関係節の動詞は、le（＜ler）、vay（＜ir）といずれも「直説法」である。以上のことから、時間の形式名詞にかかるものに限らず、連体用法述語一般について、その叙述内容が現実であるときは「直説法」に含めるというのが、ロドリゲスの受けとめ方であったと考えられる。したがって、日本大文典で「直説法」の「不完全過去」の項に収められている動詞の現在形も、資料中の実例が連体用法として現れて矛盾はないということになる。

4　主節の時と同時の過去の事態を示す動詞の連体現在形

前章で引用した、ロドリゲスの挙げている動詞の連体現在形（大文典 p.70ff.）

のなかには、主節の述語が示す事態の時と同時の事態を示している例がある。

（３） 都より罷り下る時，路次で殊の外辛労しまらした。

このような、主節の時が過去で、それと同時の過去の持続的、習慣的な事態を示す連体現在形は、例えば天草本伊曽保物語にもかなりの数が見られる。まず、上の日本大文典の例と同様、時間の形式名詞にかかる動詞の連体現在形が、過去の持続的な事態を示すものとしては、

（４） さうあつて糞土を負せられて田畠に出る時、件の驢馬に行き逢へば、驢馬が立ち留つて言ふは（p.460）

（５） 紲を投げ棄てて先づその足を撫でさする間に、鳩はこの由を見及うで、忽ちそこを立つて往んだと申す。（p.469）

（６） それによつて女房はこのことを歎いて「何とせば、この辭を直さうぞ」と案じ煩ふ中に、又大酒を飲み、前後も知らず、酔ひ伏したところをふり擡げて或る櫃の中へ入れて置いて（p.496）

があり、次に、通常の名詞にかかる連体現在形で、過去の持続的な事態を示す例としては、

（７） 傍近う使はるる二人の小姓に預けおかれ、その身は風呂に入られた。（p.410）

（８） シヤントのいかにも秘蔵せらるる小犬が有つたを女中の前に呼び出し（p.421）

（９） 或る時又サモといふ所に大法会の儀が有つて、高いも賤しいも群衆する、その場に所の検役が坐せられたに、鷲一つ飛んで来てかの守護の環を含んでいづくとも知らず、飛び去つたところで（p.425）

（10） 或る貧者蟲を捕らうずると行く路次において蟬を見付け、即ちこれを捕つて殺さうとするところで（p.430）

（11） 或る時自余に混ぜぬ二人の知音うち連れ立つて行く道で、熊といふ獣に行き逢うて、一人は木に上り、いま一人は熊と闘うたが（p.470）

（12） 糧につまつて、飼ひ育つる羊を殺いて命を継いだ。（p.497）

が、同じく過去の習慣的な事態を示す例としては、

（13） しかればバビロニヤへ諸国から掛くる不審をばイソポが智略をもつて糺う啓いてやり、バビロニヤから掛けらるる不審をば他国から啓くことが稀

に有つたと聞えた。（p.432）

(14)　或る童手習ひに遣る所から友だちの手本を盗んで来れども、その母はこれを折檻もせいでおくによつて（p.475）

(15)　或る盗人蜜を造る所に行つてみれば、その主折節他行して居なんだによつて（p.483）

が存する。

これに共通する事象は、現代語においても見ることができる。工藤真由美氏[注10]は、現代日本語動詞の、形式名詞「トキ」の前に位置する場合のテンス＝アスペクト対立を、基本的には次のようであるとされた（終止の位置にある場合と変わらないテンス＝アスペクト的意味をスル、シタ、シテイルが表すこともあると言われるが、今はしばらくおく）。

〈同じ時間帯へのしめあわせ＝主文の出来事と同時、接触〉

シテイル〈持続性〉 ⟷ { スル〈限界未達成性〉 ⇕ シタ〈限界達成性〉

そして、上の結論までの過程で、主文の出来事と（狭義）同時の出来事を示す、従属文のシテイルやスルの例を示しておられる。

(16)　「この前、ここを歩いている時、君のことを思い出した」（花壇）

(17)　酒も終り、緒方がお茶漬けをたべている時、小女が知らせに来た。（蛇と鳩）

(18)　すぐその中からチョコレートを塗った鳶色のカステラを出して頬張った。そうしてそれを食うときに、必きょうこの菓子を私にくれた二人の男女は、幸福な一対として世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わった。（こころ）

(19)　「ここへ来るとき、護送車のなかで、きみはそう言ったが、嘘だったんだな」（冬の旅）

(20)　「ここから帰る時、ぽろぽろ涙をこぼしながら、坂を下って行ったそうよ。肉屋の小僧が途中で逢って、びっくりしたって」（青梅雨）

つまり、主文が過去の場合には、従属文のシテイル、スルが過去の出来事を示すわけである。ただ工藤氏は、「トキ」の前に来るものが動作動詞である場合、〈持続〉を表すには、例(16)や(17)のようにシテイルとなることが多く、(18)のようなスルの示す出来事は、主文の出来事と〈全体的同時性〉の関係にあるとされる。この点は、先に挙げた中世語の例と異なっている。

また高橋太郎氏[注11]は、現代日本語における動詞の連体形の文法的意味を観察

され、連体現在形は未来の動作、現在の動作の進行、現在の状態を表すアクチュアルな用法と、動作の繰り返し、潜在的な属性としての動作を表すポテンシャルな用法とをもち、そのテンスは発話時を基準にする場合と、主文のテンポラリティーを基準にする場合とがあるとしておられる。以下は、高橋氏の示された例のなかで、文全体が過去のことを言っているために、動詞の連体現在形が過去の持続的な事態を示す結果になっているものである。

(21) ドアの外に去る彼の後姿を眺めながら真知子は考へた。（野上弥生子　真知子）

(22) 夜は白粉を真白にぬった女が黄い声を出して道行く人々の袖を引いた。（田山花袋　時は過ぎゆく）

(23) 山師の遣ふ鋸につれて、大きな枝は凄しい音を立てゝ落ちた。（時は）

(24) 実の勉強するランプの灯ばかりが遅くまで四畳半を照らした。（時は）

（以上「現在の動作の進行をあらわす用法」）

(25) 二人は支那門に向ふ踏みつけ道を行った。（宮本百合子　道標）

(26) 玉子は……どこか邪気ないところを有つ人だった。（島崎藤村　桜の実の熟する時）

(27) 一族がふりかざしたものは林立する十字架だった。（道標）

(28) その一瞬の複雑きわまる口もとの皺をとらえた。（道標）

（以上「状態をあらわす用法」）

次の例は「ポテンシャルな用法」で、連体現在形が過去の習慣的な事態を示している。

(29) …この姉の……単純さの中には、いつも真知子を驚かす或るものがあった。（真知子）

ただし例(23)や(24)は、先に見た工藤氏の言われる主文の出来事との〈全体的同時性〉によって成り立つのであろう。「時」等の形式名詞にかかる場合だけでなく、通常の名詞にかかる連体用法でも、いわゆる動作動詞は～テイルとなって持続を表すのが、現代日本語の普通の言い方である。

(30) 私は太郎が本を読んでいる／?読む部屋に入った。（相対的未来か習慣の意味でなければ現在形は不自然）

こうした中世語と現代語における連体現在形の文法的意味の相違は、中世語が～テイルや～テオルといった動詞の形式を、現代語ほど発達させていなかったことによると考えられる。中世語の動詞の現在形は、現代語の現在形と異なって、自由に持続を表わし得たのであり、時代間の表現の推移を反映する、捷解新語（初本1676年刊、第一次改修本1748年刊）の次のような例もある（もっともこれ

について論ずるには、まず終止現在形の意味の史的変遷を把握しておかねばなるまい）。

(31) a. 二番特送が豊崎に日和を待つと申し来た程に（初本、一８）

b. 二特送使が、豊崎に日和を待ってをると申して参ったゆゑ（第一次改修本、一11ウ）

さて、先に挙げた例(３)および例(４)～(15)を、ラテン語やポルトガル語で言い表すとすれば、日本語の動詞の連体現在形は、従属節の中の未完了過去や「不完全過去」に置き換えられると推定できる。その場合、時間の形式名詞にかかる例(３)～(６)の対訳では、接続詞に導かれるいわゆる時の副詞節が用いられ、通常の名詞にかかる例(７)～(15)の対訳では、関係節が用いられるであろう。ちなみに（ラテン語を含む）ロマンス諸語において、主節の動詞が完了や「完全過去」（単純過去、定過去、遠過去とも）、従属節の動詞が未完了過去や「不完全過去」（半過去、不完了過去とも）で、後者が前者の示す事柄と同時の、前者の背景をなす事柄を示すという文は、先の例(２)のようにごく一般的である――バーナード・コムリー[注12]は、前者と後者の形式の対立をアスペクトの対立と解して、前者の形式を「完結相（perfective）の過去」、後者の形式を「不完結相（imperfective）の過去」と呼び、ハラルト・ヴァインリヒ[注13]はテクスト言語学の立場から、前景と背景に基づいて「浮き彫り」を与えることが、「語られた世界」の中で半過去と単純過去の対立がもっている唯一の機能であるとしている。

ロドリゲスが日本大文典で「直説法」の「不完全過去」にあたるとした動詞の現在形は、終止用法の例が資料に見られないとなれば、以上に述べてきた連体用法の場合、すなわち主節の時と同時の、過去の持続的、習慣的な事態を示す連体現在形をさしていた可能性が非常に高い。なかでも「時」「間」「中」等の形式名詞にかかるものは、かかってゆく語彙が限られているだけに特殊な印象を与えやすく、それが大文典 p.46 の記述につながったのではないかと想像される。日本語の連体用法の述語を「直説法」とする受けとめ方は、前章ですでに確認した。

上の結論は、日本語の動詞の連体現在形を、未完了過去や「不完全過去」に置き換えた対訳例によって裏づけられるであろう。そして、そのような実例は存在する。

5　日本語の連体現在形に対応する未完了過去または「不完全過去」の例

まず挙げられるのが、第１章で引いた日本大文典 p.46 の記述の原文である。

Do preterito Imperfeito.

Este preterito não tem propria voz, mas vsão do presente do Indica-

tiuo, ou do preterito perfeito, particularmente quando precede o presente do Indicatiuo junto cõ Toqui, aida, vchi, *ao preterito perfeito. Vt,* **Caqu** vchini maitta. ***Em quãto escreuia*** *veo, &c.*

(10v.、太字は筆者)

日本語の動詞の連体現在形「書く」が、対訳ポルトガル語では接続詞 em quãto に導かれる副詞節の中の、「不完全過去」である escreuia (<escrever) に置き換えられている。

また同じく日本大文典には、「すべての格にわたる関係詞の例」(p.334ff.)の下の一項として、次の個所がある。

○その外の格については一定の規則がないから実例が教へるであらう。Iriyeuo **coguiyuqu** caino xidzucuto, votçuru namidamo arasôte, tamoto sarani foxiayezu.(入江を<u>漕ぎ行く</u>櫂のしづくと落つる涙も争うて，袂更にほしあへず。) As gotas dos remos com que **remauam**.(それを以て漕ぐ所の櫂の雫)の意。「平家」(Feique)三

……　(p.336ff.、太字・下線は筆者)

日本語の連体現在形「漕ぎ行く」に、ポルトガル語の「不完全過去」の動詞 remauam (<remar) が関係節の中で対応している。ここに引用された平家物語の例は、主節の述語が「ほしあへず」と文語体の歴史的現在になっていて、典型的なものから外れるけれども、天草本平家物語の該当する文は次のとおりである。

(32) 入江を漕ぎゆく櫂のしづくと，落つる涙も争うて，袂もさらに<u>ほしあへられなんだ</u>. (p.193)

さらに、他の同時代の資料に目を転ずると、コリャード懺悔録(1632年刊)の対訳ラテン語に、問題の事象と関わる未完了過去の動詞が2例見られる。

(33) a. 私がこの商物を買うたれば、同じい物を買いに突き合うた人数が多うて、<u>売る</u>人それにとり乱れて、その価を忘れられたところで、余は、何も言わずに、そのまま金を済さいで立ち去りまらした。(p.46)

b. *Ego diebus praeteritis accessi vt emerem quandam rem, cumque multi alij ad emendum ex eadem conuenissent, confusus qui illam* ***vendebat*** *prae multitudine, oblitus est pretij eius quod ego emeram, ego vero hoc aduertens & nihil dicens aut soluens, hoc modo discessi.* (p.47)

(34) a. そのほか、ある人の公事について、余はその贔屓して、勝つほど合力致そうと約束したれば、随分それに念を入れ、なるほど働いたれど

も、その公事をし糺す間に過分の賄賂（または）まいとを取りまらした。（p.56）

b. *Praeterea: cum ego causam cuiusdam hominis, & litem suscepissem, vt eius partes agerem, & promisissem, me vsque ad victoriam illum adiuturum; etiam si accurate, & diligenter quantum potui, laboraueriim, antequam eius causa iudicaretur, dum* ***erat*** *in litigatione, valide me subornauit.* (p.57)

(33)a.の連体現在形「売る」が、(33)b.では関係節の中の未完了過去 vendebat（<vendo）に、(34)a.の連体現在形「し糺す」が、(34)b.では接続詞 dum に導かれる副詞節の中の未完了過去 erat（<sum）（in litigatione）（古典ラテン語の規範に従うならば、est..となるべきところである）に、それぞれ置き換えられている。

おわりに

ロドリゲス日本大文典が中世口語の研究の上で絶大な価値を有することは言うまでもなく、大文典の記述をそのまま援用した国語史の論考や概説も数多く見られる[注14]。しかし、日本大文典は西洋人に日本語を修得させる目的で、西洋人によって著されたものであり、そこではあくまでも西洋語的な視点から、日本語が観察され整理されているはずなのである。したがって、個々の記述において、ロドリゲスがどのような言語事象を対象とする意図をもっていたかについての探求が、今後は一層進められるべきであろう。これはむしろ国語学史研究の立場であるかもしれないが、この作業を経てはじめて、国語史研究資料としての日本大文典は完全に利用されると思われる。

注１　鈴木泰の一連の論考など。

注２　「動詞未然形＋助動詞ルル・ラルル、スル・サスル」を含む。またロドリゲス大文典ではアル、ゴザル等の存在動詞を特別扱いにしているので、本稿でもとりあげない。

注３　ジョアン・ロドリゲス原著、土井忠生訳註『日本大文典』（1955）に拠る。

注４　いわゆる文語下二段活用に相当する。

注５　土井忠生『吉利支丹語学の研究』（1942）。

注６　浜田敦「規範――四十年の総括、つづき――」（『国語国文』49―１、1980・１）など。

注７　安田章「「語り」の表現機構――中世の場合――」（『表現研究』34、1981・９）。

注８　レベッカ・ポズナー、風間喜代三・長神悟共訳『ロマンス語入門』（1982）p.216-222。

注９　この辺りのロドリゲスの記述は、天草版アルヴァレスラテン文典の、

……さらに、「時」「間(ヒマ)に」「ところに」等のようなある種の接辞が直説法の形に後置されて、ラテン語の接続法に対応する。例、「思う時」「思うに」「思うところに」。例、『黒船の物語』「沖の方(かた)を眺むる折節、朝日差しわたる」沖が眺められていた時（Cum conspicaretur(ママ) altum）等。（拙訳、20-20v）

に基づいている。ラテン語においては、接続詞 cum に導かれる副詞節の中では主として接続法が用いられるけれども、cum の後身であるポルトガル語の como は、必ずしも接続法を要求せず、後に直説法が来る場合もある。

注10　工藤真由美「現代日本語の従属文のテンスとアスペクト」（『横浜国立大学人文紀要　第二類　語学・文学』36、1989・10）。

注11　高橋太郎「動詞の連体形「する」「した」についての一考察」（国立国語研究所『ことばの研究　第４集』1973）。なお高橋太郎「連体形のもつ統語論的な機能と形態論的な性格の関係」（『教育国語』39、1974・12）をも参考にした。

注12　バーナード・コムリー、山田小枝訳『アスペクト』（1988）。

注13　ハラルト・ヴァインリヒ、脇阪豊・大瀧敏夫・竹島俊之・原野昇共訳『時制論　文学テクストの分析』（1982）。

注14　例えば、注７安田1981の「注(17)」。

（敬称略）

（ふくだ・よしいちろう　大阪星光学院中・高等学校教諭）